

第十四回国際歴史学会議に出席して

藤 枝 晃

〔はじめに〕 今年（一九七五）八月二二―二十九日に米國サンフランシスコで開かれた第十四回国際歴史学会議 XIV Congrès International des Sciences Historiques に出席した。この会議は五年ごとに開かれるもので、前回は一九七〇年八月にモスクワで開かれた。私は同月の末にストックホルムで開催される国際中国学会（それ以前の名称は「ジュニア・シンローグの会議」、この年にジュニアの形容詞が外された）に出る途中に、乗替のためにモスクワに泊ったら、恰度この国際歴史学会議が開かれていたときで、ホテルではたたくさんの友人たちに出会った。日本からは一〇〇人以上も来ていると聞いて、その雄大さに圧倒された記憶がある。その前の第十二回（一九六五）はウィーンで開かれた由であるが、そのときの日本からの出席者は極めて少なかったらしい。こんどのサンフランシスコは七〇人ばかりの登録者があ

ったと聞いた。参加国は五七ヶ国で、全登録者は一、四五五人にもなったそうであるが、日本からの七〇人というのは地元のアメリカに次ぐもので、ソビエト連邦からの五〇人を上廻る。しかし、各部会の会場ではソ連の代表たちが盛んに討論をするが、日本人同僚はさほど目立たないので、ソ連の出席者の方が多いのではなにかという印象をうけた。

こんどの会議には、私の健康上の不安と、アメリカ入国のために若干の特別手続を必要とする事情があったため、当初は気が進まなかったのであるが、日本国内委員会から部会の一つの司会者に推薦されたため、勝手ばかりも言ってられない仕儀となって出席したという次第である。会議の全体についての公的報告は、国内委員会などから出されると思うから、ここには全くの個人的見聞を語ることにする。次回以後のこの会議に出る方々に何らかの

足しになれば幸いである。

〔準備と運営〕

この様に大きな会議であったが、運営がなかなか手際よく行っていたのに感心した。サンフランシスコの中心にあるフェアモント・ホテルが会議本部並びに諸部会の主会場となり、ほかに二三の大小の部会は、その向い側のマーク・ホプキンス・ホテルやカリフォルニア大学などで開かれ、また閉会式と閉会式とは、これもフェアモントから数十メートル離れただけのメイソン館の大講堂で行なわれた。そして、大会役員のほか、部の発表者、司会者、指定討論者など、プログラムに名の出る者は、みな主会場のフェアモント・ホテルに泊ることを義務づけられたことも、運営成功の一因と見られる。もっとも、ここまでやるのは大変な費用のかかることではあるが。

開会の前日にホテル内の事務局で登録をすると、一つの書類ケースをくれた。中には、見学・レセプション・遠足・音楽会などの招待状がたくさんはいついて、さらにそれら言わば番外行事を日付と時刻の順に並べた非公式プログラム、参加者のためのレストランの案内とか、見物の手引のパンフレットまで添えてあって、なかなか親切である。招待の方は参加者ごとにまちなちなだから、前以てそれを仕分けておく事務局の手間は想像に余りあ

る。右の書類ケースにはサンフランシスコ市のマークのついた名札が貼ってあったから、市からの寄贈なのだろうと思う。市長が開会式に出て歓迎の挨拶をすることになっていたが、開会の二三日前から市の警官と消防夫とがストライキに入っていて、当日は市長はそれどころではなかった。

準備の面で、もっと大変だったろうと思うのは、部会の発表原稿を前以てオフセット印刷して国内委員会を通じて参加者に配布していたことである。出発前に数十冊を受取り、間に合わなかった分は会場で受取った。一〇〇頁ばかりの長篇も少なくない。そして会場では発表者はその全文を読むことはせず、一〇分以内の要約ないし補足説明をするだけで、すぐに討論に入るという仕組みである。だから質問や討論の多くは前以て原稿を用意して来ているし、中にはそれを印刷して来た人まであったのには驚いた。

これは運営の部類にはいると思うが、すべての部会の討論はカセットテープに録音せられた。一軒の業者が請負って、各部会場に録音器を仕掛けておき、何十分かごとにテープの交換に廻ってくる。そのテープは部会が終るとともに複製されて、希望者はほしだけ買うことができる。十何年前に東京で開かれたある国際会議で、写真屋が会場や控室のスナップをとりまくって、翌朝に控室の壁に見本を貼り出し、申込むとその翌日に焼付をくれた。

怡度、日本の写真産業の伸び盛りの時でもあり、外国人の参会者にも評判がよく、その時はそれに感心していた。しかし、録音テープがこんなに簡単に作られる段階になってみると、スナップ写真とは言わば「お愛想」程度のものでしかく、テープの方は公式の記録となり得るものである。カセット交換のためにテープ屋が会場に来るたびに、私は東京のスナップ写真を思出していた。

〔部会分け〕 会議は大小いくつもの部会に分れる。大きな部会は、第一部会「大テーマ」と第二部会「方法論の諸問題」とで、第一部会は(a)「歴史と社会」、(b)「人権の問題」、(c)「革命」、(d)「少数民族」、(e)「移住」、(f)「アジア・アフリカの伝統と革新」を議題とし、第二部会は(a)「歴史の発生、構造、発展」、(b)「歴史記述における価値判断」、(c)「歴史科学としての歴史記述」、(d)「歴史の記録法の追求」、(e)「人間と環境」、(f)「現代史史料の編纂」などを議題とする。第三部会は「時代別部会」で、古代、中世、近世、現代の四部門に分れ、それぞれが幾つかの議題をもつ。ほかに第四部門として法制史学会、経済史学会、ビザンチン史学会、軍事史学会など、十余りの関連国際学会の会合がある。

第一、第二部会では、それぞれ担当諸国の国内委員会が論文を用意し、あらかじめ指名された討論者が午前中に討論し、午後は

自由討論となる。第三部会は午後だけで、幾つもの小部会に分れるから一つの会場の出席者は二〇―五〇人ていどの小ぢんまりした会合になる。

要するに、合わせて一〇以上の大小の部会が一斉に開かれる仕組みである。

〔司会者会議〕

開会式とそのあとのレセプションの終わったあとで、夕刻から司会者の打合せ会議が召集された。会場には「司会者の心得」と言った様なことを述べた英仏両文の刷りものを用意されてあった。「過去における五年ごとの会議の経験は、会議の盛り上がりが一に司会者の手腕に係ることを示している……。」という書き出しで、いろいろ心得が書いてある。なるほど、他のふだんの学会では、発表者が発表原稿を読むのに時間を喰われ、討論の時間が全くなくなることさえある。こんどは、発表者は簡単に切り上げて、持ち時間（二時間）の大部分を討論に充てるというだから、能率は上るだろうけれども、司会者は大変であるということが、ここで実感をもってきた。その刷りものには、とくに第一、第二の大部会の手続きの指示が詳しい。これを承っておいたら宜いのだろうと、おとなしく読んでいたら、それについて立って質問する人が現われた。すると「いや、そうではない」と、そ

の質問に対する反論が出て、騒然となった。結局は、「細部は司会者の裁量一つ」といった様なことで、取留めないまま散会となった。それまでは、いくらか気楽に構えていたのが、この打合せ会に出て、些か成行きが心細くなった。

〔中世史部会〕 第三部会は古代、中世、近世、現代と分かれ、中世史部会はさらに(1)「遊牧社会」、(2)「二三〇〇年ごろヨーロッパにおける諸文明の出会い」の二つの主題に分かれる。私は「遊牧社会」のさいしよの日の司会が当たっていた。副司会者はモンゴルのピラ氏。その日の発表者はギユレスコ(ルーマニア)、羽田明(日本)、ナツァグドルジ(モンゴル)の三人。みな同じホテルに泊っているの、開会までにこれらの人たちと打合わせをしておくことができた。開会式のあとのレセプションで思いがけなくもオウエン・ラティモア教授を見つけたので、翌日の部会で発言を呉々も頼んでおいた。これが当たった。発表の一つごとにラティモア教授が立って、行届いたコメントや疑問を述べ、他の参加者がさらにそれに対して意見を加えると言った風に部会はまことに調子よく進行した。その上、発言者の多くが英仏両語で発言を繰返したことも効果的であった。さいごのナツァグドルジ氏の発表と総合討論とはピラ氏に司会を任せ、私は皆さんの討論を

楽しく拝聴している内に時間となって、散会の宣言をした。そのとき、ソ連のティフヴィンスキー教授が寄って来て「ご苦労さん、この部会はなかなか良かった」と握手してくれたときは、内心は全くホッとした気持であった。

この日の討論の中で記憶にのこるのは、「フン族は『国家』と言える程の組織であったのか」というシュプラー教授の質問、ナツァグドルジ氏の「遊牧民封建制」の把握についての社会主義諸国からの何人かの代表たちの賛成討論、「チングス汗の評価」についての議論などであった。

翌日は日曜で第三部会は休みになり、「遊牧社会」の発表は三日の月曜に引続いて行なわれた。一通りの討論が終ったところで、私は阪大基礎工学部の川井直人教授が近ごろ唱え出した「氣候変動と人間の歴史との相関」の説を紹介して、遊牧社会などの歴史を見るには、こんなことをもっと考慮した方が宜いのではないか、と提言した。川井教授は地磁気の専門家で、地磁気の強弱の変動が五〇〇年ばかり遅れて地表の氣候の寒暖の変化となって現われる。その寒暖の両極のあたりで顕著な人間歴史の変動が見られる様である、という意見である。モンゴルの代表たちによると、ソ連にもその様な説を唱える人がある由で、かれらは川井説にも大きな関心を示し、私のもって行った図表の写しを早速作っ

て持帰った。

〔見学と招待〕

登録のときに渡された書類ケースにたくさん

の招待状がはいっていたことを前に申しした。そのほかに、希望者だけの招待や有料の会合もある。嬉しかったのは、折から開かれていた新中国考古展への招待である。早速これの参加を申込んだ。

この展観は中国で二組を用意して、その一組は一昨年夏に京都で見ることができた。もう一組はヨーロッパへ送られ、パリの国際東洋学者会議に出席した人たちがそれを見てきたのを読んでいた。

ところが、そちらの組が廻り廻ってサンフランシスコの東洋美術館で展観されていたのである。たいへんな人気で、一般入場者は二時間以上も列んでやっと入場する。特別の招待団体は開場の一時間前に入場させるので、四日目の早朝に四台のバスで美術館に向った。実はそれより前に、到着早々に同美術館の部長がホテルに電話してくれて、開会式の日を早朝に裏口入場して見せてもらっていた。予期してなかった大展観を二度まで覗くことができたという次第である。このほど、同美術館のダルジャンセ館長から来た手紙によると、九週間の開催期間中に八三万五千の観客があったという。

第五日の夕に、国外からの参会者の多くが市内の家庭へ夕食に

招かれた。私の当たったのは市の西端にちかい住宅街に住む機械技師の自宅で、夫人が歴史同好会の会員で、娘が史学科の学生という家庭である。招かれたのは駒沢大の桑原君と私、それにフランス人が三人で、また同宅は娘の先生にあたる歴史の教授たちも招いていた。その家に着いて相客のフランス人と顔を合わせたら、何と、中の二人は昨年京都へ来て、人文研でも講演をしたH・ミシエル夫妻であった。ところが、その娘の名も同音のミシエルである。食事中にミシエル先生は主人夫妻に向って「あなたがミシェル！とお嬢さんを呼ぶたびに、私はドキリとします」と笑っていた。主菜は七面鳥の丸焼、食事のあとで欲談がつづき、十一時過ぎにご主人の車で送られてホテルに帰った。数日前にその奥さんから来た手紙に、同家では十一月の感謝祭にもまた七面鳥の丸焼のご馳走をして、客たちに夏に歴史学者たちをこれでもてなした次第を話した、とあった。

その次の夕は、サンフランシスコ駐在の各国の領事が、会議に出ているそれぞれの国の代表団を招いてのレセプションに充てられていた。折れ合いがつかなかったのか、他の日に催した国もある。プログラムを見ると十八ヶ国になる。たぶん、これだけがサンフランシスコに公館を置く国々の総数にちかいのであろう。中には領事館がないためらしく、何々文化協会といった団体が開催

した国もある。各国公館が一斉にこの日を中心に催したのは、組織委員会がそうしたことにまで気を配ってのことに違いない。ところが日本総領事館だけは、この会議に出ている日本人出席者を招くことをしなかった。

近くのスタンフォード、カリフォルニア、州立の三大学からキャンパス見学の招待があったが、部会の時間と重なるので、私が出かけたのはバークレーのカリフォルニア大学だけだった。ほかの見学や遠足は、どれも坂道の登り降りがあるので、みな敬遠した。

ホテルでは夜もいろいろな番外の会合が開かれる。第四日の夜、通りかかった広間で Oral History Association という会合が開かれていたので、ちょっと覗いてみた。文字で書いた記録ばかりが歴史の記録ではなく、近ごろは録音テープという記録法もある、という趣旨の様であった。四十人ばかりの出席者のほぼ半分がアメリカの人たちであった。かれらの国の独立と言った重大事件の記録の製作、保存、利用法を熱心に論じていた。

〔用語の問題〕

最終日の夜、日本人参加者の集会で、羽田教授は「言葉のまずさを気にしないで、部会ではほとんどん意見を述べるべきだ」と提言した。たしかに、日本人の出席者はおとなし

過ぎたとは言える。だが、こんなこともあった。私の出ていたある部会で、一人の日本人出席者がかなりたどたどしい英語で意見を述べた。すると、傍にいた外国人が、「貴君は日本語で話さない。それをこの人に英語に訳してもらったら宜い。」と、さきほどから上手な英語で話していた別の日本人を指さした。羽田教授の意見に反対するためにこの話を持出したのではない。この場合は即席でしゃべろうとしたために、うまく意思が通じなかったのである。発表原稿はすべて前以て送られて来ているのであるから、質問や討論は前もって原稿を作って行けば、この場合の様にはならない。そして実際に大部分の討論はその様に用意されて来ていた。

会議の前に送られて来た「サーキュラー」(一) (二)にはどれも「用語は英語と仏語」とあった。ところが司会者会議で配られた「司会者心得」にはさらに独・西・伊・露語が付加えられてあった。私が出席した若干の部会では、仏語の方が英語よりやや多く使われていた様な感じで、それに少しの独語も話される。会場が米国であるだけに、この現象は些か意外であった。次回の大会ではどの様になるか、気懸りなところである。これだけ多くの部会場のすべてに同時通訳を期待することは、まづ望めそうにない。

〔次回の大会〕 次回は五年後にルーマニアのブカレストで開かれることを、閉会式で知らされた。中世史部会の冒頭に発表したギユレスコ氏 Constantin C. Giurescu は、ルーマニアの国内委員長で、開会式と閉会式とは正面の雑壇に坐っていた。ブカレスト大学の名誉教授で、同国学士院と社会科学アカデミーとの会員である。その父も同じく歴史の教授で学士院会員であり、また息子もいま同じ道を進んでいるとのことであった。かれの発表原稿は六二頁の大部なものであったが、現在のルーマニアの地域に現われたスキタイ、フンからタタールに至るまでの十一の遊牧民とルーマニアとの関わり合いを扱ったもので、同国の多くの歴史学者の合作になるものであり、同氏はその代表者として発表の任に当たったもの様である。それも前任者二人が続けて死んで、大会直前に発表者の役が廻ってきたという。同氏のくれた著書『ルーマニア統一国家の形成』（一九七二）は、題名の示す通り、一のルーマニア民族史ないし国史である。また、同国学士院並に社会科学アカデミー共編の『ルーマニア歴史叢書』の一冊『土着民族と外来民族との諸関係』（一九七五）は、この主題を扱った二一篇の論文を集めたもので、こんどの発表原稿の土台となっているものの如く見うけられた。日本のように地域のはっきりしている国では国史研究が歴史研究の中心になる傾向のあるのは自

然の勢であるとしても、国境が錯綜して國家の興亡のはげしい東ヨーロッパでも、国史が重く見られていることは、他の諸国の代表の報告などにも見られ、誠に迂濶な話ながら、私には一つの発見であった。

〔付記〕 はじめに第十三、十二回の会議に触れたが、その前の第十一回は、一九六〇年にストックホルムで開かれ、学術会議から派遣されて山本達郎教授が出席した。同教授はその後で京都まで来て有志の会合で会議の模様をたいへん詳しく報告してくれた。このほど研究室を片付けるうちに、そのとき山本教授が配った報告プリント（会議プログラムの写しなど）が見つかったので、右の次第を述べて余白を填める。

京都大学名誉教授